Chudai News

「もっと強く」

「パリに向けてチームを背負える選手になる」

東京五輪で活躍した部井久アダム勇樹選手（写真提供：共同通信社）

部井久アダム勇樹選手が決意新た

五輪選手の報告会

2020東京オリンピックには、中央大学の在学生、卒業生を合わせて計14人が出場した（別表）。このうち水泳部とハンドボール部、フェンシング部の選手6人が9月23日、多摩キャンパスで開かれた五輪報告会に出席（オンラインを含む）し、「独特の緊張感でいい経験ができた」「出場が自信になった」と振り返り、「中大生や学校関係者の応援のおかげで力を出し切れた」と感謝した。「３年後のパリ五輪を目指して成長したい」「パリでメダルを獲得したい」と今後の抱負を語る選手もいた。

ハンドボール男子代表で在学生の部井久アダム勇樹選手（法４）は「予選リーグ突破はならなかったが、点を取るという役割を少しは果たせた」と語り、「五輪でもっと強くなりたいという思いが芽生えた。個人の成長がチームの成長につながると思うので、パリに向けてチームを背負える選手になりたい」と決意を新たにしていた。

（出席した選手の主な発言から）

水泳部

塩浦慎理選手
「延期もあって、思うような成績を上げられず、この一年間、悔しい思いをしてきました。まだまだ速く泳げるという手応えがあり、来年の福岡での世界選手権、パリでのメダル獲得を目標に頑張っています」（オンラインでの発言から）

池本凪沙選手
「小さいころからの夢だった大舞台で緊張しましたが、良い経験になった。パリに向けて一日一日を大切に練習に取り組みたい」

砂間敬太選手
「応援をありがとうございます。延期や無観客と（さまざまな意味で）難しい五輪でした。年齢が上がってきているが、そのぶん成長できていると思う。パリでは（中大同期の）セオン（岡澤セオン選手＝ボクシング）、祐希（石川祐希選手＝バレーボール男子）と一緒にメダルを取って、中大を盛り上げたい」

ハンドボール部

部井久アダム勇樹選手
「けがを乗り越え、コンディションを上げて、主に左バックのポジションで出場しました。成長した部分が出た大会になったと思う。世界との差は詰まっているが、勝ち切れないという部分が課題として残った。成長できるよう有意義に時間を過ごしてパリを目指したい。チームを背負える選手になりたい」

杉岡尚樹選手
「（予選リーグ）最後のポルトガル戦で2点差をつけて勝てば得失点差で予選突破の可能性があった（結果は1点差の勝利）が、その差をどう埋めていくかを考えさせられた。自分のハンドボール人生の今後につながる良い大会となった」（オンラインでの発言から）

フェンシング部

永野雄大選手
「団体戦に出場し、（実力が）トップの米国との力の差を感じた。五輪はどの選手も懸けてきているものがあるということや、独特の緊張感を経験できた。どうすれば世界トップの選手に勝てるかをもう一度見つめ直し、パリでは個人でも団体でもメダルを取れるよう頑張りたい」

☆五輪選手の報告会出席者

大村雅彦理事長
酒井正三郎総長（当時）
河合久学長
松丸和夫常任理事
石井靖常任理事
松本雄一郎常任理事

〈水泳部出席者〉
青木英孝部会長（総合政策学部長）
髙橋雄介監督（理工学部教授）

〈ハンドボール部出席者〉
森茂岳雄部会長（文学部教授）
実方智監督

〈フェンシング部出席者〉
冨田隆監督

☆東京オリンピック　中央大学在学・出身の出場選手・成績（敬称略）

〈在学生〉

池本凪沙（法１）	競泳女子４×200メートルフリーリレー　予選1組５位・全体9位
上野優佳（法２）	フェンシング・女子フルーレ　個人６位入賞・団体６位入賞
部井久アダム勇樹（法４）	ハンドボール男子　予選Bグループ6位・全体11位

〈卒業生〉

飯塚翔太（ミズノ）	陸上男子200メートル　予選１組６位
大本里佳（ANAイトマン）	競泳女子４×100メートルフリーリレー　予選２組５位・全体９位
塩浦慎理（イトマン東進）	競泳男子４×100メートルフリーリレー　予選1組７位・全体13位
砂間敬太（イトマン東進）	競泳男子200メートル背泳ぎ　準決勝2組7位・全体14位
岡澤セオン（INSPA）	ボクシング男子ウエルター級（63～69キロ）　予選（T16）敗退
杉岡尚樹（トヨタ車体）	ハンドボール男子　予選Bグループ6位・全体11位
関田誠大（堺ブレイザーズ）	バレーボール男子　準々決勝敗退（７位入賞）
石川祐希（パワーバレー・ミラノ）	バレーボール男子　準々決勝敗退（７位入賞）
江村美咲（立飛ホールディングス）	フェンシング女子サーブル　個人予選（T16）敗退・団体５位入賞
永野雄大（NEXUSフェンシングクラブ）	フェンシング男子フルーレ　団体4位入賞
羽野一志（NTTコミュニケーションズ）	７人制ラグビー男子　11位

授業“成果物”の書籍

「読書する知性『本づくり』演習成果」出版

2020年度スタートの文学部「実践的教養演習」で受講生が編集
コンセプトは「20歳前後に読んだ本」　2022年度の教科書としても使用

本にも人にも出会いがあり、出会いそこないがある。たとえ出会いそこなっても、人間は生きている限り、出会い直すことができる。

（大田美和教授）

「本」との出会いは「旅」に例えることができ、「本」と向きあう読書の時間は、まさしく人にとって精神の「旅」にほかならないだろう。

（及川淳子准教授）

どんな名作といわれるものであっても、時が来なければ、自分にとっての名作にはなり得ないし、誰にでも等しく同じ効果をもたらす作品というのも、決してありはしない。（中略）本は確かに多くのことを教えてくれるが、それが自分にとって意味をもつかどうかは、そのときの自分次第だ。（阿部幸信教授）

生物学は、たしかに脳のしくみや感覚のしくみについては教えてくれる。だが、意識はそうした生物学的な装置とは独立したものとみなすことができる。（中略）なぜこの余計なものである意識が存在するのか。これが、中学以来、ぼくがもちつづけていた根本的な疑問であった。（中略）僕はこのとき（注＝大学3年のころ）の読書経験で、ようやく哲学という学問分野があるということを知った。そして、ぼくが中学のときから考えていたようなことを、学問として大真面目に議論しているひとたちがいるということを知ったのである。

（飯盛元章兼任講師）

そこでわかることは、時代の中で評価される作品と時代を超えて評価される作品があるということだ。それは文学作品には限らず、あらゆるものにいえることなのかもしれない。（中略）今だけに通用する教育や研究はしたくない、という気持ちは、おそらく二〇歳前後に読んだ多くの近代小説から影響を得ている。

（宇佐美毅教授）

～「読書する知性『本づくり』演習成果」より
（いずれも中央大学文学部の先生方が執筆した内容から）

2020年度にスタートした文学部の新しい演習授業「実践的教養演習」で、受講した学生が編集を担当した書籍「読書する知性『本づくり』演習成果」が出版された。本のコンセプトは「20歳前後に読んだ本」で、中央大学で教鞭をとる教員11人が寄稿した。受講生6人が実際の編集作業における悩みや、やりがいなどを著したコラムも掲載されている。

受講生はコンセプトの設定、執筆者の選定と依頼から、編集や本のタイトルの命名・装幀（そうてい）まで取り組んだ。「読書する知性」というタイトルを考案した文学部国文学専攻４年の小林真生（まお）さんは「中大の建学の精神を受け継ぐユニバーシティーメッセージ『行動する知性』をオマージュしました」と説明し、「手に取った人の将来への道しるべとなる本だと思います。私は本を作るのが夢で、出版できて本当にうれしかった」と喜ぶ。

授業を担当した中村昇教授（哲学）は「学生の皆さんと同じ年頃に先生方が何を読み、何を思っていたかを知ることのできる内容で、共感してもらえると思います。文章の言葉遣いなどにも先生方の個性が表れていて、まるで玉手箱のような本です」と話している。中村教授が担当する2022年度の一部の授業では教科書として使用するという。

実践的教養演習は、モノを創る学部ではない文学部がその「人文知」を生かして、授業の成果として形あるモノを創造するという過程で、学生に主体性や自主性、協調性を培ってもらうのが狙い。2020年度は「ヒトとモノ」を共通テーマに、少人数の3部門に分かれ、「大学の授業で使う教科書をつくる」「文化資源を紹介するキャンパスマップの作成」「動画による文学部の魅力発信」という３つの課題に挑戦した。キャンパスマップは中央大学にある文化資源の紹介という要素を取り入れた4ページの構成で、魅力発信動画とともに大学の公式ホームページで閲覧、視聴できる。

2021年度の共通テーマは「時間　記憶　記録」。部門ごとにプロの編集者、脚本家、映画監督、イベントプランナーらの話を聞く機会を設けながら授業が進んでいる。演習全体を統括して担当する吉野朋美教授（国文学）は「2022年度も全学部、全学年の学生を対象に、電子出版と映像の2部門で授業を進めていく予定です。学修内容によっては、文学部だけでなく他学部の先生方にも、講義などの協力をお願いしており、学部横断的な授業としても続けていければと思います」と話している。

「読書する知性『本づくり』演習成果」（中央大学出版部）は240ページ、税込み1100円。中大生協などで販売している。